

## 第十六 if = 西三河への奉職

かくして「神天」は、それこそ大騒動になるべきところをお助けあって避けていただき、私は西三河幡豆横須賀に奉職することになったのである。ところが、ここでも私に取っては、一つの重大なるifが働いたのである。それというのも、それまで師範の卒業生は、いずれも出身の郡に配属され、少数の成績が芳しくない者が他郡に配属させられることで、勿論私も知多郡に、それも伯父の日比の計らいで、故里半田の小学校とのみ考えていたが、当時「新官僚」と謳われた守屋栄夫氏が、内務省より颯爽として学務部長で着任されるや、師範の卒業生をその出身郡に赴任させるのは良くない！との考えで、師範の卒業生を全県へばらまくことになった。その結果私はそれまで名も聞いたことのない、幡豆郡の横須賀尋常高等小学校に着任する事となったのである。ではそれは私にとっては、如何なる意義があったかという、それは二つあった。

一つは、それによって大学入学後、河上肇博士の宗教の導師である「無我愛」の行者である伊藤証信師を相知ることになった事と、今一つは、横須賀の地で相知っていた森武士氏を中心として、爾後西三河の地に永く道縁を結ぶことが出来たことである。同時にこれに対して故里の知多郡では、故西山茂氏の高配によって、京大卒業と同時に「知多哲学会」というものが成立して、これは後年建国大学赴任までは継続したのであった。「天」はこれによって、私に尾張と三河の一隅にそれぞれ道縁を給わったと言える。